二〇二〇年度　国語　後期　解答・解説
（五〇分／一〇〇点　※配点詳細は非公表）

【評論文（説明的文章）】

《出典》『子どもは判ってくれない』（文春文庫）

普通は「大人の思考と行動」に関わる情報は「レポート」という形で語られない。「教育」という形で「若者たち」に半ば強制的に供与される。本著は、「大人の思考と行動」がどのようなものであるかについて「レポート」というかたちで若者に説明しようとする文章である。

《筆者》内田樹

一九五〇年、東京都生まれ。神戸女学院大学文学部名誉教授。二〇〇七年、『私版、ユダヤ文化論』で第六回小林秀雄賞を受賞。『日本辺境論』で新書大賞二〇一〇を受賞。二〇一一年、第三回伊丹十三賞を受賞。他の著書に『ためらいの論理学』『寝ながら学べる構造主義』などがある。

問一　漢字の問題

a　非難　欠点・過失を責めとがめること。
b　獲得　手に入れること。得ること。
c　無防備　危険等に対する備えのないこと。
d　敏感　感覚が鋭く、ちょっとしたこともすぐ感じ取るさま。
e　怠る　すべきことをしないでおくこと。

語彙の学習は、国語の授業だけではなく、全ての教科の授業時や自学自習時、日常生活のあらゆる場面で意識することから始まる。学習する際は、①読み、②書き、③意味の理解、④語彙の使用、⑤構成や故事まで気にかけ、音読や書く練習、辞書を引く、語彙を利用して短文をつくってみるなど、工夫することが大切である。

問二　本文の内容読解（順接・変化の結果）

傍線部の前の段落にある「フリーターという言葉ができてから」という文や、傍線部の三行あとにある「好きなことが見つかるまで」の文に注目しよう。ここから、フリーターという便利な言葉が出来てから、就職せずに、好きなことが見つかるまでチャンスを待つ若い人が増えたと村上が述べていることがわかる。この内容と合致するのは選択肢イである。アは、「数多くのアルバイトを体験しながら」とあるが、アルバイトの数には言及していないため不適当。ウの内容は本文中にない。エは「減った」が間違い。

問三　空欄補充（文と文、段落間の関係）

接続語の問題は、空欄の前後の文と文の関係、段落間の関係に注意しよう。

〔　A　〕の前で村上の意見に賛成であると述べながら、空欄後で「言い添えておくと」と職業選択について筆者なりの考えを述べている。村上の意見を踏まえつつ自分の意見を述べていることを踏まえると、「ただ」という条件付けの接続語が適当である。

〔　B　〕の前では「単純な語彙でおのれの嫌悪を」語る人間は「おのれの『個性』についての意識が希薄」だと述べ、空欄の後に、だからそのような人間は「個性を実現する、ということは百パーセント起こりえない」と述べている。ここでは因果関係を示す「だから」という接続語が適当である。

問四　語句の意味を明らかにする問題

②　雄弁　ある事実などをはっきり

表していること。

④　骨身に染みる　深く感じること。

問五　空欄補充（文脈からの語彙の推測）

問三でも確認したように、筆者は村上の意見に概ね賛成をして論を進め、「そのような人間が『好きなこと』を見出して、個性を実現する、というようなことは百パーセント起こりえない」と述べている。村上の疑問と同じように筆者自身も考えていることが分かるため、〔　C　〕は選択肢の「共有」が妥当である。

「責任」という言葉に注目すると、二行後にも「人間の自己責任」という文が見つかる。ここから、〔　D　〕ではなく人間の責任である、つまり、「AではなくBである」という対比構造が見えてくる。人、つまり個人の対比となるのは社会であるため、選択肢の答えは「社会」となる。

問六　本文の内容読解（因果関係）

「訓練を受ける」ことの大事さは、傍線部以降に書かれている。直後に「それは『自分にできないことを言語化する』ことを要求するからである」とある。そして『十分なデータがないところで死活的に重要な決定をする』というのが『訓練を受ける』ということの最初の、そして一番重い意味」であり、それが、『おのれの不能を言語化する』ということの一つの実践的なかたちである」と述べられている。この点が踏まえられている選択肢はウである。ア「未知の知識や技術を習得すること」とあるが、「その訓練を通じで獲得される情報やスキルの『内容』よりもずっと重い」と本文にあるため不適当。訓練を受けることが『好きなこと』を発見することにつながる」とは書かれていないためイも不適当。エは「訓練を受ける」ことで五感の錬磨となると書かれているが「どの職業でも通用する力を身につけることができる」とは述べられていないため不適当。

問七　本文の内容読解（換言・因果関係）

同じ内容の言い換えている部分を探し、答えを探していこう。言い換えを探す際は、「自分」「できないこと」「言語化」と細かく区切ると分かりやすい。そうすると、二頁目の「自分がなぜ」の一文が見つかる。「自分がなぜ、ある種の社会的活動について、嫌悪や脱力感を感じるか、ということを丁寧に言葉にしていく作業」というのは、「自分のできないことを言語化する」と同義である。その点を踏まえると、後半の「自分の『個性』の輪郭を知る」ことが「自分のできないことを言語化する」ことによってできることだと分かる。解答欄に合わせて書き抜こう。

問八　本文の内容読解（全体の趣旨）

本文と照らし合わせて選択肢を吟味しよう。ここで不適当なものは生徒Cの発言である。本文では「訓練を受ける」ことの大事さや「訓練を受ける」ことによって五感が鍛えられることは述べていた。しかし、「適当に『訓練を受けて』」みて「向いてなかった」とへらへらできる人間は「感覚が鈍」く、「どのような『学校』へ通おうとも、どのような『訓練』を受けようとも、決してプロフェッショナルになることはできない」と否定的な意見を述べている。そのため、生徒Cの意見が本文と合致していないことが分かる。アは「職業選択というのは『好きなことをやる』のではなく、『できないこと』『やりたくないこと』を消去

していった果てに『残ったものをやる』ものだと私は考えている」の一文と対応する。イとエは、問六や七と対応する選択肢である。

【小説（文学的文章）】

≪出典≫『羊と鋼の森』（文藝春秋所収）

ピアノにもクラシックにも縁がなかった外村という若者が、ピアノの調律師である板鳥と出会うことで、ピアノの調律の素晴らしさを感じ、調律師を目指す物語である。二〇一八年には映画化もされている。

≪筆者≫宮下奈都

一九六七年、福井県生まれ。上智大学文学部哲学学科卒業。二〇〇四年、「静かな雨」が文學界新人賞佳作に入選、デビュー。二〇一一年に刊行された『誰かが足りない』が本屋大賞にノミネート。他の著書に『遠くの声に耳を澄ませて』『よろこびの歌』などがある。

問一　本文の内容理解（語彙と文脈理解）

「足踏み」とは進行せずに、そのままの位置で足を交互にふむことであり、転じて物事が停滞して進歩しないことをさしている。傍線部のある段落を確認すると、一弦ずつ音を合わせていくが気持ちの中で何かがずれる→音の波をつかまえられない→音が合わない。そのため次に進めなくなり「足踏み」をしている状態となっていることがわかる。

問二　本文の内容理解（比喩表現と登場人物の状況を対応させながら読み取る問題）

「もがく」とは「もだえ苦しんで手足を動かす。いらだつ。あせる。」ということである。問一も踏まえつつ読むと「泳げるはずだと飛び込んだ」が、前に進むことができず、苦しみいらだっていることが分かる。では、どのようなことに対してそう思っているのか。文脈から比喩表現の解釈を行おう。「僕」は調律師板鳥に憧れ、専門学校に進み、今は板鳥の勤める楽器店に就職した。「僕」は定時まで通常業務に励み、夜になると一人店に残り調律の練習をしている。調律師に求められるのは音を合わせる以上のことなのに、音の波をつかまえることさえできてないともだえ苦しんでいる。つまり、できるはずだと信じ調律の練習を続けているが、なかなか納得のいく調律が出来ず苦しんでいることが分かる。以上のことを踏まえると、アの選択肢が適当である。イは「一人仕方なく」や「先輩たちを恨んでいる」が間違い。ウは「誰もいない夜の楽器店で練習すれば自分の目指す調律が出来る」と本文に書かれていないことや「絶望」という心情までは読み取れないため間違い。エは「いつも通りの調律ができずに」が不適当。

問三　慣用句の問題

〔　A　〕の三行前に「板鳥さんを追いかけた」とあり、直前には「必死だった」とある。このことから急いで追いかけたことが考えられるため、エの「息を切らせている」が適当。アの「口が減らない」は口が達者で、反論や負け惜しみをいくらでも言うという意である。必死に教えを乞う僕の説明としては不適当である。

問四　語彙に基づく心情理解

③　しげしげと　　しきりに。じっと見つめるさま。

④　立つ瀬がない　立場がない。面目がない。

問五　本文の内容理解（対比関係と展開理解）

「どうこつこつするのが正しいんでしょう」と必死に質問する「僕」に対し、板鳥は「この仕事に正しいかどうかという基準はありません。正しいという言葉には気をつけたほうがいい」と言っている。そのことを踏まえ、「〔　B　〕には気をつけよう、とだけは思った」と言っているので、〔　B　〕には「正しい」が入る。ホームランを狙ってはいけないように、調律師の仕事は地道にこつこつと練習するしかなく、正しいかどうかで決まるものではないと板鳥は述べている。

問六　本文の内容理解（人物像と心情理解）

柳さんは、技術にも自信がない「僕」の不安を見てとり、「だいじょうぶだって」「堂々としていたほうがいいんだ」と言っており、「僕」に自信をつけさせようとしていることが分かる。また、柳さんの人柄として、「先輩なのに、ぜんぜん威張ったりしない」とあり、〔　C　〕の前には「僕」と柳さんのやりとりで、先輩である柳さんは「笑顔」で対応していることからもエの「笑った」が適当。

問七　本文の内容理解（人物像と心情理解）

〔　C　〕の後には「先輩なのに、ぜんぜん威張ったり偉そうだったりしない」とあり、〔　C　〕の前には「僕」と柳さんのやりとりで、先輩である柳さんは「笑顔」で対応していることからもエの「笑った」が適当。

問八　本文の内容理解（直喩と換言の問題）

傍線部の後の「最初に聴いた演奏に懐いた」の内容を「ように」と直接的にたとえて表現した文になっているため、直喩法が正解。

傍線部は、生まれた直後目の前で動き声を出すものを親だと思うインプリンティングのことをいう。2の問題は、この比喩表現を文脈に合わせて理解する問題である。傍線部を含む段落の前の段落から確認しよう。高校を出るまでほとんどクラシック音楽を聴いたことなかった「僕」だが、調律の練習をしながら夢中になって聴きはじめる。ピアニスト同士聞き比べる余裕はなく、同じピアニストが重ならないように、沢山聴いていく。特定のピアニストにこだわるわけではなく、最初に聴いた演奏が「僕」のスタンダードとなると書かれている。以上の点を踏まえると、エの選択肢が適当である。アの「彼らの作った音楽だけが価値がある」や、イの「クラシック音楽になかなか親しむことが出来ず、かつて聞いていた流行りの曲だけを聞きたいと思いなおした」は本文にない。ウは「他の人が演奏しても物足りなく感じる」とあるが、特定のピアニストにこだわっているわけではないため不適当。

問九　本文の内容理解（大意の把握）

正解はウとオ。アの「ピアノの調律をするときには絶対音感が必要」だとはどこにも述べられていない。いろいろな曲集を聴いたと述べられているが「どのピアニストがどのように演奏しているかを把握しなければならない」とは述べられていないため、イは不適当。エの「時には上下関係を大切にし、先輩の言葉に従って励んでいく必要がある」ということは述べられていないため不適当である。

【古典（古文）】

〈出典〉『枕草子』（岩波文庫版）

平安中期の随筆。鋭い感覚で描いた随想や

宮廷生活の記録。

≪作者≫清少納言。中宮定子の女房。

問一　歴史的仮名遣いの問題

歴史的仮名遣いを現代仮名遣いにあらためる規則について、まとめて知っておくようにしたい。古典は日頃馴染みのないものであるため、平素から意識して読み慣れておいてほしい。

問二　月の異名の問題

一月…睦月（むつき）二月…如月（きさらぎ）三月…弥生（やよい）四月…卯月（うづき）五月…皐月（さつき）六月…水無月（みなづき）七月…文月（ふづき）八月…葉月（はづき）九月…長月（ながつき）十月…神無月（かんなづき）十一月…霜月（しもつき）十二月…師走（しわす）

問三　文脈と古語の意味・主体と文学史

1

②　けざやかに　あざやかなさま。はっきりしているさま。

⑥　あはれに　しみじみと心を動かされる。

2

随筆の主体は筆者であるため、漢字四字の条件に当てはまる清少納言が正解。

問四　古文における「の」の用法

助詞「の」の意味・用法は、「～が」と訳せる主格の「の」、「～の」と訳せる連体修飾格の「の」、「～で」と訳せる同格の「の」、「～のもの、～のこと」と訳せる体言の代用の「の」の四つがある。④「雨の」、⑦「露の」、⑨「いひたることどもの」は主語となっているため、「の」は主格を表す。⑩「人の」はあとに体言がつづいており、⑩だけが他と違う用法だと分かる。⑩は連体修飾格の「の」である。

問五　比喩表現の問題

傍線部「白き玉をつらぬきたる」（白い玉を糸で突き通した）は、雨がかけわたした蜘蛛の巣にかかり、滴が蜘蛛の巣の糸にかかっている様子をあらわしたもの。

問六　内容理解（場面と因果関係の把握）

傍線部の直前に、「萩などのいとおもげなるに、露に落つるに枝のうち動きて、人も手もふれぬに、みとかみざまへあがりたるも」とあり、萩が露によって自然と動くさまを「いみじうをかし」と思っていることが分かる。選択肢として適当なものはアである。

問七　係り結びの法則の理解

「をかしけれ」（形容詞「をかし」の已然形）。係結びの法則については、係助詞の種類と意味の確認、結びの語の活用形まで整理しておこう。

問八　内容読解（要旨の把握）

口語訳を参考にして、本文の内容展開をおさえる。自然の細微な箇所に目を向け、風情が感じられる景色を列挙していくが、最後にこの章段における筆者の所感、趣旨が語られているためエが正解。選択肢アは「最も」風情があるとは述べられておらず、選択肢イとウは読点をはさんで後半の内容が誤っている。

問九　古典文学の知識理解

文学史や文学史上における作品については、タイトル・作者・成立時代・ジャンルだけで

なく、作品の内容や後世の評価や特徴まで踏まえて学習するようにしてほしい。

【現代語訳】

（陰暦）九月のころ、一晩中降り通した雨が、今朝はやんで、朝日がぱっとあざやかに輝きだしたころ、庭の植えこみの露が、こぼれ落ちるほど濡れおいているのも、まことに風情がある。透垣の羅文、あるいは軒の上などに、かけわたした蜘蛛の巣が破れずに残っているのに雨がかかっているさまが、まるで白い玉を糸で貫き通したようなのは、たいそうしみじみとした趣があっておもしろい。

すこし日が高くなってくると、萩などが、露を含んでひどく重そうに垂れているのに、露が落ちると枝が（自然と）ゆれ動いて、だれも手を触れないのにすっと上のほうへはねあがったのも、たいそうおもしろいといったことなどが、他の人の心にはすこしもおもしろくあるまいと思われて、それがまたおもしろいことである。